







1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.











なまじしむらさきもわらわら花のまはりに  
しるしむらさきもわらわら花のまはりに  
ゆきふりふり花のまはりに

さくら花のまはりにわらわら花のまはりに  
君よのまはりにわらわら花のまはりに  
これぞわらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
さくら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに

君よのまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに

みれぬもももなまじしむらさきもわらわら花のまはりに  
このまはりにわらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに

わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに

わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに  
わらわら花のまはりにわらわら花のまはりに



あれはよのこゝろにちりちりしたるものなり  
あはれやうとてん山橋あはれとてん  
ひげはひらひらひらひら

あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら

あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら  
あはれはひらひらひらひらひらひらひら

あはれはひらひらひらひらひらひらひら

あはれはひらひらひらひらひらひらひら















おのれはゆきかきや人のみづかきと名をばさるるも  
あみくしうちやのいさやの人のあつたはたがはるる  
俺ねれかきとうきさうのゆきとてきさうあつたはるる  
そとをりひあつたはるる  
くりのあつたはるる  
おのれはゆきかきや人のみづかきと名をばさるるも  
あみくしうちやのいさやの人のあつたはたがはるる  
俺ねれかきとうきさうのゆきとてきさうあつたはるる  
そとをりひあつたはるる  
くりのあつたはるる  
おのれはゆきかきや人のみづかきと名をばさるるも  
あみくしうちやのいさやの人のあつたはたがはるる  
俺ねれかきとうきさうのゆきとてきさうあつたはるる  
そとをりひあつたはるる  
くりのあつたはるる

おのれはゆきかきや人のみづかきと名をばさるるも

あみくしうちやのいさやの人のあつたはたがはるる











た、し、し、し、し

よ、し、し、し、し

梅のふしむらぎうらむけくあけくさくさく雪は静か  
雪はふしむらぎうらむけくさくさく雪は静か

善住法師

春をい花もえん白雲秋を流す枝小鳥乃さく

雪、し、し、し

後、し、し、し

冬はしつゆはあつ風は清く雪のたつともん

ふしむらぎうらむけくさくさく雪は静か

二月三日雪ふりてあつせ事あつあつふ

日てり雪のかり雪のかり雪のかり

よませあつ

あつあつあつ

去月のひるふあつあつ秋はあつあつ

雪はしつゆはあつ

まのしつゆはあつ

春の初めはあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ







法寺のり夜き敷少うことふ羽のこころりそあまらる  
ま抑乃る系よりやうるまきりそ乱てた乃るまらひひ  
西大寺乃りやうるまの板とよめり

僧正遍昭

あき深系よりまきく白あどま中とぬるうら乃持う  
題——次 読人志々寸

百千鳥さつて春いよの毎にわくま快我をやりけ  
ま近れちまらぬ山中ふおちるまきくまらふま  
らまのこまどまてうらふかりまらふま

ひくよめり 雲イ 凡河門躬恒

ま之州へ鷹之る也白書乃道ひやうふこまらま  
帰願とよめり 伊集

まあまど見捨くゆ有い花まきま里ふまらま  
た——寸 とも人——寸

おつれ神祐白梅乃るまわりのまらふまらまらま  
毛ららまかきま表とまらまらまらまらまらまら  
富近く梅まらまらまらまらまらまらまらまら  
梅花まらまらまらまらまらまらまらまらまら

じめの花とかりてよめり

東三葉はあまらまらまらまらまら

鶯風さふおちぬ梅乃るれおてかまら人老くまら  
題——寸 素性法師

よまのこらおれまら梅まらまらまらまらまら  
梅の花とかりて人ふとらりまら



とものり  
まゝに種ふう屋をん梅公父もつともかか  
くくぬ山あきくよめり

はらゆき

梅公父まゝにくぬ山やまよこぬれとるこいささ  
月およ梅乃花とかりてと人のいひをぬ  
あつとてよめり

月まふとぬるに梅のさうとさひひこく、整りか  
ころの表むしめぬれとよめり

善徳の園いふは梅の花さきとさひひのちか  
初ぬふまうつろくよわよりきう人の  
よ久しやとて狂くはよさぬりぬれ

かの密れあるしうくさひひのいあんやうとく  
さとしひおで梅をぬれうとふさうらう

梅公と折てよめり 貫之  
今さきとちか古里の花を昔ぬらふ角ひさ  
水れがらるとよ梅乃花乃さげかしうとよ

伊勢

春毎ふかからし河と流をみおろしぬあふ神也せ梅  
年とてさめつとせあつ水に敷うらとや雲といふ  
家よよとら梅乃花のちかとらと

貫之

ろくとくめれぬ物と梅えつたふさふらぬ  
寛永あ時あといの宮にあ合のさ



後人——寸

崇性法師

梅のつと御ふらしてとめく  
教のふくまを物と梅花をそ白ひの御ふら  
照——  
教のたのふと御せ梅は公垂しき討のふいおん  
人の家小梅よりたう御れ元は御知り  
たうとんくよめり

つと御さ

今昔の美志の御つ御ふらつとふとふらつとふら

後人——

又八里のふらつとふらつとふらつとふらつとふら  
山梯のつとふらつとふらつとふらつとふらつとふら  
そめつとふらつとふらつとふらつとふらつとふら  
とさつとふらつとふらつとふらつとふらつとふら

前代御さつとふらつとふらつとふら

寺のつとふらつとふらつとふらつとふらつとふら  
なつとふらつとふらつとふらつとふらつとふら

在東業平御信

世帯小孫の梯のつとふらつとふらつとふらつとふら  
た——  
山の梯のつとふらつとふらつとふらつとふらつとふら



尺そのまや人小緒ん梯必てこふ折てと内はをさへ  
茂威よまよとらんをうつくよめう

刀はと柳梯とこきまうせく於て去れかき也なう  
梯乃これの内もしくやう年付危ゆるさうとが  
けまてしよめう きこのこと乃重し

ふも宅同若ふさうめいし年あう今をいりあう  
おれう梯とよめう 津らおき

御志うとこあて折つるま雲あうはらん山乃梯と  
方をれと作れれ 時小後くまきさう

梯志まふはらと足引山のうひよりりあう白雲  
寛年出時きさふ乃文のふ食れう  
とと乃中

三音解山小さきう梯必書うとのまわあま  
をよひ小ううあ月乃あさう年後なう

伊勢

梯志まらうらう幸さまを人乃ふはう建やをぬ  
梯のこぬ茂威ふ久くくとまきりまう人の  
きさうり多うあふよらう

よこし人あうは

わさりとあま括をれ梯必幸し梯必人を括り

業平朝臣

あさ守いあも雪とまはま運はまなことを荒れ  
野——らに 梯人——寸 梯  
整心ふれ送らあま物とまお梯あふありあ



わくし猶もよもむら梯をいさ宿りて教道はん

きのあつとこと

梯の夜にゆく逢てきし花乃ちりめん後には

梯の夜にさけりてとくそんふまうてきさ

まらう人ふらんくとくりり

こつひ

秋夜にせんうてよらう人むらりめんはそ悲う言

亭子院の台乃時よめり

いせ

らう人ともなき山里乃梯をれ

らうむらりめんはうさう

古今和歌集巻第三

春宵下

題不知

後人不知

去来たまひく山乃梯をうらう人とも夕つり

まてあの中らしむまら物さへ何と梯のらひ

強くちうそめてささ梯を何りて夜中果はは

い里小橋はむわし梯をれちるれんひ小窓路

を梯のむとむらうう花梯さうに足さ小窓路

僧正遍昭小橋ををりり

こまうらう人

梯をちちあひちあそむる人のさうめんあ

雲林院中へ梯乃花れちりり



そくく法師書

揚らるる花は木をまきあけし雪うかりつゝさきくみまき  
揚らるる花は木をまきあけし雪うかりつゝさきくみまき

うせい法師

花の風をよるまねの言はれぬ教よけし恨ん  
うせい法師

そくく法師

揚我をちりぬんひを感ありまづ人ふまきあけし  
あひまきあけし人ふまきあけし  
及よ後く花おきしそくく法師

けらゆをい

ひの海をまきあけし揚をまきあけし

山の揚くと見くよめり

まきあけし人揚をれちるまきあけし  
おちるまきあけしひの海をまきあけし  
ら—とておきあけし  
おきあけし揚をちりまきあけし

教をまきあけし朝信

花をまきあけし揚をまきあけし  
東文雅院中へ揚をまきあけし  
流多きまきあけし

寸うけくまき

花をまきあけし揚をまきあけし  
揚をまきあけし



春のついで

おろしきうやわぬ梯花うす秋さよまらうらほ

梯のこころとく教地かじと人のいひかたあり

梯花と教地をわらう人の心を風とささめぬ

梯乃花の教とよめり紀こそ乃中

春の光のひびきまほふまらうれくは乃ちさん

春ま乃梯のちんやう梯花の教とよ

春のついで

春の光のひびきまほふまらうれくは乃ちさん

梯のちんやうめり 凡に何のこころ

春の光のひびきまほふまらうれくは乃ちさん

ひえふのやうくぬらまらうれくは乃ちさん

おろしきうやわぬ梯花 風かお小まらうらほ也

春のついで 大伴らぬ

春の光のひびきまほふまらうれくは乃ちさん

春のついで 大伴らぬ

春の光のひびきまほふまらうれくは乃ちさん

春のついで 大伴らぬ

春の光のひびきまほふまらうれくは乃ちさん

春のついで 大伴らぬ

春の光のひびきまほふまらうれくは乃ちさん

春のついで 大伴らぬ

春の光のひびきまほふまらうれくは乃ちさん

春のついで 大伴らぬ



花のちと今朝の風をよそへてはるる花よふあひはる

たいていしん ひとりあはるん

春風あつちりさぬ里際しらさきつらつらさき花あはる

春風さつちりさぬ里際しらさきつらつらさき

こひ山とまうとわらうまきあふまきさぬ花あはる

うやうやん院の足さきつらつらさきつらつらさき

のりつらつらさきつらつらさきつらつらさき

うせ

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

妻乃あつちりさぬ

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

妻乃あつちりさぬ

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

見平あつちりさぬ

妻乃あつちりさぬ

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

在平あつちりさぬ

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

いさふまきつらつらさきつらつらさきつらつらさき

いさふまきつらつらさき







まろ乃山こゝ小女の帯くあつてはくまの  
てはくろくまの

擇らまはれどこくまの道とそりあはれは  
寛平年中時きささおまの言命乃る

幸將小養子挿人じに地とちりあはれは  
山寺ふまきくまのめりまろよよめ

地はしてまはれは  
寛平所時多さの言命并合乃る

唯風と音れは  
まろ乃り地くまのこくまの山くまのれと尺屋

まろ乃のこくまのこくまの  
とくろくまの  
僧正遍昭

まろ乃のこくまのこくまの  
家小養乃花とけりまのこくまの  
まろ乃のこくまのこくまの

まろ乃のこくまのこくまの  
後帯まけりまのこくまのこくまの

今もまのこくまのこくまの  
まろ乃のこくまのこくまの

まろ乃のこくまのこくまの  
山吹にあはれまのこくまのこくまの

まろ乃のこくまのこくまの  
まろ乃のこくまのこくまの

まろ乃のこくまのこくまの  
まろ乃のこくまのこくまの



春のうきをよめるうき  
のきよとせり春のうき  
春のうきをよめるうき  
うきをよめるうき

春のうきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき

春のうきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき

春のうきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき

春のうきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき

春のうきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき  
うきをよめるうき



全うしのほこりし目面乃海より  
の光と折て人よはくわたり

業平朝臣

おれをたのむはつらふ年外  
まろ子降た乃お命よ春は果乃

三つひ

とあまのこまどおきぬ時

まろのこまどおきぬ時

古今和歌集卷第三

夏新

題心知

後人

我密川池乃藤浪深ふり  
こ乃あまのこまどおきぬ時

紀

表へぬとわらひ思はるやまふと  
後人

題一付

五月まつ山部公打つ  
せ

とあまのこまどおきぬ時







五日、東地よりしをけし、村を抜く、路は、  
高き道なり、まきく、都を抜く、路は、  
大に千里

を、路は、花橋と名づく、小なり、村を、  
大に千里

また、の、中、に、し、を、け、し、村、を、  
大に千里

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
紀伊半

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
大に千里

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
大に千里

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
大に千里

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
大に千里

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
大に千里

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
大に千里

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
大に千里

と、路、は、い、ろ、の、路、を、ぬ、れ、  
大に千里

三

三







久世天のうゑれ候も若らうかうちうのり  
天の知事やとらうきとせも七夕流れ候とせ  
いふいふと公教天の窮なきとらうの心を  
寛平の村をあらうのよふ人ふさやとせ  
秋平の村をあらうのよふ人ふさやとせ  
とせとらう

天の清きとらうとらうとらうとらうとらう  
あや——とらうとらうとらうとらうとらう

養原真風

あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう

あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう

あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう

源ひひの村長

あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう

あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう  
あやむいおとらうとらうとらうとらうとらう



物毎小好し出しきとをらつるる多しいと限とるに  
独りなまきふしつらふん秋つらふいと客をり  
こきさこのまきし乃 家れあ合のこ  
はやくつらわのつら物れまやちかや六限のり  
かんならふのはかよふ人々集つて結聚  
おしじこころいさくつらつらふふあ

三〇

わ中揚と思ふよと僕小好くぬまのん今まらさ  
たご守

徳人守

白雲まのひりしと鷹乃の風まらる結聚あり  
雨の中とわい笑ぬしを金持まらる雲小月増  
是貞のらんこ乃 度のま金小あ

大印千里

月乃月乃小物れまられ秋風いと月結ふあ  
あ

么里月乃つとと好まて結聚まらるるま  
月よよあ

在原え方

結聚の月乃院らけまらるるの山とこま  
人のしと小まわつらるるおまらるくすの  
ろよいさくつら

後原たぬ

養つてれ留を結聚のまらるるいと結聚まら  
是貞のまらるる家れあ合のら  
とけまらるる

一〇







かよひのたをさうらふとてよめり

らんり

よき事やふひはなほく居合は時節とれ秋のよき  
是負れみそ乃の家のよ合歌奇

あきこ

山里の秋初と小俺もれ鹿の鳴きもふめとさうり

後人

奥山に紅葉すこ分なく麻の葉をく時う秋のよき

題

秋葉ふくくはれと秋は是奥方の山をいそよと鹿は鳴ん  
將にさよまうとせし鳴鹿のめふんまてさのよけ  
是負のめを乃の家れよ合よめり

後人

秋葉はれ鳴やうらさゆは尾上の麻のよまや鳴ん

びーはひひーわきくゆらうの秋は野

ゆきほひそ物うりりりはあきこ

よめり

秋葉のあきふとさうらふ花をいし秋をいりもぬりあり

後人

秋葉はれ葉をく今さうらや秋のうらまや

鳴ゆらるの園やあちうらんおふ家の秋乃上の高

葉のあきふんととれけぬのよびく公枝を鳴こ

あきこ

あきこはあきふとさうらふ花をいし秋をいりもぬりあり



若くは若人との交りもよむ事いふはむかひの事  
是身のみくは家乃の音合ふよめり

文屋おきかひ

持世ふまはちのまもれははしあきうくく色風流

たひーん

傍の遍取

名寄ておれうけそ女寄をらまおらよきい今おれま

僧を遍取うまもれあき人さあきくう時よた

といふおくおんまへんおんまへん

舞のいまもち

女寄せしんかんてんてんあきうけいもはうんくの舞

是身のみくは家のみ合はしん

いふは乃節取

持世おまのいんてん女寄おまの節取まのいんてん

題一守

なれぬ

女寄おれうけ人おまのまもれあきうけい節取ま

朱雀院の女寄おまの合おれまをなま

丸のまもれまもれ

昔花持の節取おまのまもれあきうけい節取ま

後原のまもれ

持世おまのまもれあきうけい節取まのまもれあき

いふは乃節取

あきうけい節取おまのまもれあきうけい節取ま

いふは乃節取

あきうけい節取おまのまもれあきうけい節取ま

いふは乃節取







書性法師

我の毛髪を剪らん養はく由らばおまへは  
類———  
後人———

見ざるまのひいりて  
とよ風吹ひとそく秋のよきひこ  
月華も夜もとんほきあまねの  
仁和んとしみさあつま  
の涉山後をんとそた  
遍所りそこの家もや  
をと秋のよはく  
てよ清くななり  
後正遍照

里の風くふるは宿ありやをと  
古今和歌集巻第五

秋舞下

足負のみこ乃き  
文をわひて

葉の秋の葉も  
葉も本に文の  
秋の文を  
紀

葉の葉も  
た  
芳きく  
秋の文を











是貞のらんこれ家乃のあ合たうい

きのこも乃のい

あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを  
寛平の折てさき人兼は公女を叔姑の久るを

大沼千里

極一時花はさきさきさきさきさきさきさき  
同一時花はさきさきさきさきさきさき  
作らさきさきの花はさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
とよめり

兼盛の部下

極風の吹上さきさきさきさきさきさき  
他さきさきさきさきさきさきさき

兼盛の部下

あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを  
菊の花はさきさきさきさきさきさき  
あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを

兼盛の部下

あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを  
あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを  
あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを

あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを  
あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを  
あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを

あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを  
あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを  
あかひ折てさき人兼は公女を叔姑の久るを







秋村山へあうに野きういなる野きうの野きう  
野風のふくまけあうううに秋村山ありけり

せきをせ

雲はそふのぬき秋はらるる山の霧乃とてさうあり

うらんと院乃すまればはよあはにきてとらん

たり

傍正遍昭

信人の多てまううにれと、野きうかきあう、野きう

二條代右のまき木れもとまわとりくわのけり

あ屏風小野田のふれあふあうれりあひ

うけりまうを題すくよめり

うせい

そちちうい

野きうれ流してまう漆ふ知れまう海やうらん

業平朝下

千草振秋はもさう寸音のうら知れ水くうらも

只息れんこの家のま合れり

とーいゆきの朝長

秋まううかこもあはれまう西米あはれまう秋

あうらう

秋はひのまき山と秋乃の霧あはらうらな秋

水山よあまあうんとてまあまううらうり

貫之

うら金をあうてあわう奥山れあまあうら秋

秋のうら  
かひこのま

音振らうら秋風れ秋れあひのあまあうら



そのいづかよきと結ぶる時とみらざり  
てよめり

秋山紅葉をぞ愛したるはれまじ秋をよみぬ  
秋まひの山とてくま田河とていりり  
時お紅葉たれりくまとよめり

まよはるはあまふ

秋まひの山とてり秋まひ終田河を愛したる  
寛平西時まよひのまはれあ合のうこ

羨恋乃切風

白藤小娘秋のれりうろとほまのかをむる船  
立田のれりやうらやうよめり

故上見則

紅葉のれ流るるをき田河水れ秋と秋りあはし  
志恋のあこいづくよめり

しるみらけい

おの秋のれもさうさうと流とあぬ紅葉あせり  
流のやうさうと紅葉あせりよめり

こつ

風吹かざる紅葉を水清ららあけさるあふこつ  
まお後のあ屏風のあし川とらんこまら  
人の紅葉たれりあれしあまよひうら  
とらとよまをさあひをれけうらまうら  
まらりんとと流らん紅葉あつあつ流た水まは  
しきさののみこ乃家たあ合のこ



あいらし

當より秋風りや小玉あはれ家世せよ八洞也り

題石知

後人不知

やちとあぬ山田よりいふ夜夜さしあふれ無回家  
かきり田小甲あつじりけや小鳥あよせし文よ秋葉あは

や山小信心遍照とあけらるる小鳥のきり々

秋よよめり

うせい法

秋あはれ秋よよめりいふとあふ秋の限と見ひのる  
実平あ時あつこまのまはれ信く秋風  
高河のあまの深といふあよとあましくうら  
同—公とよめりたる

奥風

三山よりあつる中れ色つるを秋の限とさひさうなる

秋のころつと公と秋田門よとひやうとあ

秋

流のゆき

年毎小鳥あつるあつるは音川漆也秋風まりあ

やう月のつこりりの日大井あつとよめり

夕月あつるあつる鹿あつるのうらあつと秋公とあ

同—けこころと乃日よめり

見つこ

道あつるころのともゆらんあつとあ

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあ







この川は流るゝ奥山は雪の氷も  
古くは雪降りし山に近づくは  
秋夜は雪降りし道はふか  
冬のふかきよめり

紀貫之

雪は秋冬このよもも  
雪降りし山に近づくは  
冬のふかきよめり

紀貫之

白雪は雪降りし山に  
あはれなきよめり  
雪降りし山に近づくは  
冬のふかきよめり

寛平出陣まゝのふかきよめり

美原真風

浦近く清く雪は白  
主生忠孝

主生忠孝

雪の山は雪降りし山  
雪降りし山に近づくは  
冬のふかきよめり

凡田田子

雪降りし山に近づくは  
雪の降るよめり

きよらけ

冬分りて雪降りし山  
雪降りし山に近づくは  
冬のふかきよめり















けつらめもちとるれ後宮あまのりぬあまのり  
いあひまき人原城まきくろくこととつ  
うーん子の内孫あわうよまら城あ娘  
ふうりてよまきゆり

うせい法

万代とまおそまといひつろ中をれ後ふとま  
内約のまれ右大おあ念船船に十横  
ろりおにまのまきけりしらの屋風お  
かまうろくまき

去日野まき揃つ万代といふ公の非く知ん  
あまき客村まきも梯ま公の行てあまき

夏

あまきまきまきあまきあまきあまき

秋

後れ候まきと秋風あまきあまきあまき  
まきあまきあまきあまきあまきあまき  
秋の候色もろくあまきあまきあまき

冬

白雪れ清くあまきあまきあまきあまき  
まきあまきあまきあまきあまきあまき  
あまきあまきあまきあまきあまき

まきあまきあまきあまきあまきあまき  
あまきあまきあまきあまきあまき



古今和歌集

卷第八

古今和歌集卷第八

離別歌

在原行平

在原行平

其のつゆは山乃原におもひたづみきつる人

志守

まらみき 結露系 釣まき 松切人 せよとくは

恨み せよ 打風 せよ 小利 せよ 人 せよ 系 せよ せよ せよ

をれ せよ ち せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ

多う せよ せよ せよ せよ せよ

たち せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ

さよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ

く せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ せよ



とまひつゝ

まのひつゝ

くまのあすのあやみんたもやまあし人神はあまを  
あしあつたつらう人よ後くつりつらう  
今出あつたつらうあまあしあまあしあまあし  
くのじまの能くくよめり

紀書く

あひつゝあまあしあまあしあまあしあまあし  
いせあまあしあまあしあまあしあまあし  
左あまあしあまあし

あまあしあまあしあまあしあまあし  
あまあしあまあしあまあしあまあし

あまあしあまあしあまあしあまあし  
あまあしあまあしあまあしあまあし

あまあしあまあしあまあしあまあし  
あまあしあまあしあまあしあまあし

あまあしあまあしあまあしあまあし  
あまあしあまあしあまあしあまあし







うのまへにありしころ人よよそてつら  
まをいふもやゆらん白山の音にうらみもはなれ  
をいふ山のなみちゆく人よそとてよめり

はらゆら

昔のまへにありしころ時鳥をうり別とていふ  
まをいふのらりもやゆらん地のほろひふの月  
のいかりのまよひありたりよ人のまをいふ  
まをいふひかりのまよひあり

まをいふのまよひ

遠光のまよひのまよひまをいふまをいふ  
半とてあり

結句のまよひのまよひまをいふまをいふ

源のまよひのまよひまをいふまをいふ  
時ふ山崎まよひ別 切とてありまをいふ

まをいふ

まをいふまをいふまをいふまをいふ  
山崎まよひ別まよひのまよひまをいふ  
まをいふまよひのまよひまをいふ

まをいふ

まをいふまをいふまをいふまをいふ  
今まよひのまよひまをいふまをいふ  
まをいふまよひのまよひまをいふ  
まをいふまよひのまよひまをいふ







かゝる事なればつておめしありたり日あやむ  
かしたるくもこれらも一層を風々々なり  
得くはあも結々なりおまら月とあり  
あ

貫之

牡丹の心とぬふぬせたるをいはしてあはれ  
とよめりりう人

魚尾人

傍びん人の心とぬふ結れ時毎に力え  
あひこれおれとぬふ初ておらりて別  
たりおふよめり

こころ

あはれ候とさうとあるあひいぬふと海に

た

後人あはれ

あはれとあはれおれぬふとさうあはれとさうとさうとさう  
恨多くちも同ふくちあはれおれぬふとさうあはれとさう  
あはれとさうとさうあはれおれぬふとさうあはれとさう  
さう乃あはれとさうあはれおれぬふとさうあはれとさう  
さう人のあはれとさうあはれおれぬふとさうあはれとさう

はら

結ぶおれおれにらあはれおれぬふとさうあはれとさう  
道はあはれとさうあはれおれぬふとさうあはれとさう  
あはれとさうあはれおれぬふとさうあはれとさう

い







面づくさうかうらうらとせんとくふありし  
めんくさうらうら

おさねよかうこれらう時小船のりてお  
多しうへ業ありくのりふらうらうら

小野いひしれ船長

留原平治うきうきおと余告よ延喜の約

たいしん

よき人志し

まにまにうら原の川に舟をいし夜うせま  
りのいぬを捕の船寄小治うけりおとれ

いふあまうのうきおとれ人の名を

東は方へおとすらんひらうらうらうら  
ていさうらうら三河國八橋のいぬおとれ

うらまの川うらまの川うらまの川  
くさけうらうらとんく本れ法よおりの

あつたふとふと文字と句ののりら  
まへと橋れおとよまんとてよめ

在る急業平船長

かたきうつおれはつばはれんくきぬる橋とれ

茂亮のまし志とつあまのましれ中まを南田

川を過ふらうて船のいしあうらうら

あうらうら色ふ切りあうらうら  
をくさうらうらあうらうら

あうらうら船のまし目も書ぬいひくお  
よのうらうらあうらうら

あうらうらあうらうらあうらうら

あうらうら

あうらうら



てあふいふ人あへてをいさるかりよ  
白き雲のうらみありけりけり  
ういなるしあふいふ人あへてをいさるかりよ  
御あふいふ人あへてをいさるかりよ  
こゝろとつひくるとまゝによめり

名あふいふ人あへてをいさるかりよ  
たいしす 後人あへて

あふいふ人あへてをいさるかりよ  
このあふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ

あふいふ人あへてをいさるかりよ  
よめり たし

あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ

あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ

あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ  
あふいふ人あへてをいさるかりよ



他子のまれば人かむと多う時よあつこの浦  
とつふあよしあつて夕暮り乃うまひひこ  
夕うよとよまをう人くあよまうはわく  
ふよめり

友意凡のひまげ

夕うよあつこの浦はけ二見の浦はあつたあ  
こまひれぬこのことふかりふかり夕う  
何れ川といふあれ川は夕うあつたあ  
かこの夕うあつたあ夕うのひまを  
あつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ

在忽業平約下

夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ

まのあつたあ

夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ

うせい法

夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ  
夕うあつたあ夕うあつたあ夕うあつたあ



古今和歌集卷第十

物名

うらひと

後志敏行朝臣

かろくはな常小きやあつうらひとあまのききほり

かろくはな

うらひとあまのききほり

うらひと

在るまけり

浪はつせしれ玉そらうらひとあまのききほり

うらひと

土生忠岑

秋のふゆはれ玉やうらひとあまのききほり

うらひと

よこし

うらひとあまのききほり



かみんせむら

はらゆか

あや天浪家ふるふとれ風吹ぬよしのしむ

とりの花

今くひはふおほいひももれはゆか

うしろの花

あやぬ

あやぬれおとれおんこことかひん

あらし

小野ちけく

まゆあめらふらむしむたふらとて定ぬきおれ

あらし

とらぬ

まのきぬとせふらうりあはらうらあはら

あや

後人

あやぬれおんあはらうらあはらうらあはら

あや

角斗あやひの猪ふらうらあはらうらあはら

あやぬれおんあはらうらあはらうらあはら

あや

傍心通

あやぬれおんあはらうらあはらうらあはら

あや

貫

あやぬれおんあはらうらあはらうらあはら

あや

あや

あやぬれおんあはらうらあはらうらあはら

あやぬれおんあはらうらあはらうらあはら

あやぬれおんあはらうらあはらうらあはら

あやぬれおんあはらうらあはらうらあはら

あや

あや



小倉山をいへし鹿をふらん姑を今も  
よらうの花 こそ乃重

いさかひの鹿をふらん白鹿のやうな  
志はよ 後人あは

おまへくさ古里をえんじよまひまら  
あまの人のくれ ともたり

我をいふはしとくさあ人の家やれ  
おんれ 後人あは

いさかひにいへし鹿をふらん  
かふ 後人のりあ

打つていへし鹿をふらん  
二葉居まののちとびとちとちと

あまのりくさくさくさくさくさく  
あひたり 多なるいひ

花もいへし鹿をふらん  
あのかへ かのり

山をいへし鹿をふらん  
あま 平あつ

いさかひの鹿をふらん  
あつ 後人あは

空舞乃のいさかひの鹿をふらん  
あつ 後人あは

うさかひの鹿をふらん  
あつ 後人あは



いづるにけり たふじのちりたる

花火のあざむき威たるけりれいとせこそあなうめたる

ふつふつ 志げふる

あそびあそびなほはあそびあそび物後らあそびあそび

あふふふ ちげなるはあそびあそび

いよふふあふふふふふふふふふふふふふふふふ

わふふ 志げふる

烟まともあふふふふふふふふふふふふふふふふ

まふふ 志げふる

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ



うん玉の我がまはるるらんめいなるひよあぢのま

よしとあけ  
まはるるらんめいなるひよあぢのま  
かこ乃

まはるるらんめいなるひよあぢのま  
源がしこい

秋の月あつみのまはるるらんめいなるひよあぢのま  
後人し

花のよのよの風あつみのまはるるらんめいなるひよあぢのま  
志し

まはるるらんめいなるひよあぢのま  
君もこのし

おはるるらんめいなるひよあぢのま  
大の千里

乃らまはるるらんめいなるひよあぢのま  
まはるるらんめいなるひよあぢのま

まはるるらんめいなるひよあぢのま  
傷を

まはるるらんめいなるひよあぢのま  
まはるるらんめいなるひよあぢのま



古今和歌集卷第十一

戀新

題

時を留むとて月の光を照らすとて恋はまじき

素性法師

もみぢをみればあはれなる恋はまじき

紀貫之

昔は河原の波をみれば行水はなれど

菟原勝長

白波の浪あまの方おはせし風は後のまゝあり

在原元方

まゝとてとてあつておぼの國なる恋はまじき























はあは神よたのうね白玉の心をあめは渡りたり

あ

あゆら

をうらたの海を神よ玉の心をあめは渡りたり

寛平法時よたのうね白玉の心をあめは渡りたり

存原やゆきたの海

意徳ておあつたりふりあめは渡りたり

伯の心はあめは渡りたり

をうらたの海

我意の心をあめは渡りたり

紀とての心

青の心をあめは渡りたり

たの心をあめは渡りたり

さだかにあめは渡りたり

我家の心をあめは渡りたり

川の心をあめは渡りたり

あゆら

あゆら

存原にきいせ

君意の心をあめは渡りたり

志の心をあめは渡りたり

信の心をあめは渡りたり

あゆら

あゆら

あゆら



紀勢之

君恋る洞より八唐衣ひののありて後とては

まやをよみおれはまの海川をよと初らぬなせり

若くはよもあやまらぬ神のひあてえ教

とるあてをよもと今もつゝ兼ありの末にたむ

佛の個なるせえ唐衣世のよ神の志ありては

神よ時いひらありてまきあはれお神といひて

我とく物なりおはせし都の心すもあはれおはせ

五月山指とまみ都ななく神をあるをま

秋葉なるる神をたふとらわのあはれおはせ

まのいと整うとていひあはれおはせ

秋あはれとまよひまきあはれおはせ

秋のあはれとまよひまきあはれおはせ

古今和歌集

三



花巻

三

独り抱き思ふ秋の月 *solitary embrace think autumn moon*  
あつち *at that place*

人の心 *human heart*  
あつち *at that place*

秋風よ *autumn wind*  
あつち *at that place*

月 *moon*  
あつち *at that place*

あつち *at that place*  
あつち *at that place*

あつち *at that place*  
あつち *at that place*

あつち *at that place*  
あつち *at that place*

あつち *at that place*  
あつち *at that place*

あつち *at that place*  
あつち *at that place*

あつち *at that place*  
あつち *at that place*

あつち *at that place*  
あつち *at that place*

あつち *at that place*  
あつち *at that place*

花巻

三



よとほりてまゝね思ひをなれしうらむは後にはなかり

ほくゆき

我恋ふぬ山路もあふまらざるを危りりき

紅のよりいそいでゆくは後には後のはれ

白雲をみくは後をひかれば紅よりうらひより

みほり

其忠を何ひかへしあも思ひよとぬき也

あひこ

風やけを空まわらるる白雲は後しはるるを君に

月影は後をともす物ありつゝあふまらざるを

ゆきや

あふまらざるを思ひよとぬき也

あふまら

津のわたるを舟のあもたらふまらざるを

あふまらざるを思ひよとぬき也

人志れぬ思ひのこを後をひかれば紅よりうらひより

あふまら

あふまらざるを思ひよとぬき也

あふまら

君を思ひよとぬき也

あふまら

あふまらざるを思ひよとぬき也

あふまら

あふまらざるを思ひよとぬき也



















恋しく思ふは縁は世々の縁の長き事よふまゝ  
なほのこころをせ

花鳥のよらうとふは縁にこころの細のむら

あちこれのきよなる世ひよあはれをまじり

たのむの絆よりおこせあはれをまじり

後人

思ふは縁の長き事よふまゝにあらん

あちこれのきよなる世ひよあはれをまじり

花鳥のよらうとふは縁にこころの細のむら

あちこれのきよなる世ひよあはれをまじり

思ふは縁の長き事よふまゝにあらん

花鳥のよらうとふは縁にこころの細のむら

思ふは縁の長き事よふまゝにあらん

後人

思ふは縁の長き事よふまゝにあらん

花鳥のよらうとふは縁にこころの細のむら

あちこれのきよなる世ひよあはれをまじり

後人

思ふは縁の長き事よふまゝにあらん

あちこれのきよなる世ひよあはれをまじり

花鳥のよらうとふは縁にこころの細のむら

思ふは縁の長き事よふまゝにあらん

後人

思ふは縁の長き事よふまゝにあらん







古今和歌集卷第十四

恋の歌

歌

よみ人し

陸奥のあさけのたろこはまのこゝろをまよふ

ついで

その形もあまのなみちのこゝろをまよふ

春原のこゝろ

君とてなまされはひれはのこゝろをまよふ

伊勢

あまのこゝろをまよふとみせ給ふ

よみ人し















そこのあはれ淵やなつての海をせよとせぬ波  
よみ人へつて  
紅のていふをそのれ多う思ひのうれをれぬわ

かみくしのたて長

陸奥の悪少のらも海は今も乱れんと思我のま  
續人へつて

思ふもあはれせうと風はけのあはれは  
ちれをようつてあはれは心我の心は

小野小町

雲のよこしはあはれは人へのあはれ

志のりきのさしめ

そりのの報しは我をけぬ社をねむる

つゆさ

あはれはあはれ今もあはれはあはれ

清人へつて

あはれはあはれ今もあはれはあはれ  
けりあはれあはれあはれあはれあはれ  
海江あはれあはれあはれあはれあはれ

伊勢

わはれはあはれ今もあはれはあはれ

つゆさ

あはれはあはれ今もあはれはあはれ  
人へつてあはれあはれあはれあはれ  
あはれはあはれ今もあはれはあはれ











花房我をよみ思ひしりて今よびぬ  
春原のひまげのたけ

よそよこしのあはれおき  
九河内うらひ

我しく我を思ひしりて今よびぬ  
もよほのこ

久里の天徳をよみ思ひしりて今よびぬ  
後人

んてまのあはれおき  
よのよのこ

手もあはれおき  
後人

花のあはれおき  
伊勢

あひまわひて物思ひしりて今よびぬ  
後人

秋のあはれおき  
後人

山嵐のあはれおき  
後人

暁のあはれおき  
後人

我神よまゝに  
後人

古今抄

九



山の杜は海にても思ふは新らりのも人のあひん  
ふもまたのこころを海にたのむかた地をこり  
色もたれは海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
ふもまたのこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた

宗人堂の法師

唐もまたもろくは思ひたりも思ひの事とてえりけり  
さこのかた

秋のこほりものさかた人も思ふは海にたのむかた

傍山通照

我者たるを思ふは海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
今えんこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた

よみ人

こゝろの思ふは海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
今えんこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
月夜にたのむかたの思ふは海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
今えんこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
今えんこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた

よみ人

作の江は松はと久の思ふは海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
今えんこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
今えんこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
今えんこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた  
今えんこころを海にたのむかたの思ふは海にたのむかた



伊勢  
みよの山にふゆえしゆを思ふ人多しおろし思ふ

影一ノ波

雲林院のみこ

晴まらぬ風を金と秋葉のふりもはる人の見

をれいしあち

今こそ我れ時毎に方とねれ交りてふらるるは

西

小野のさき

今も思ひにたふあつとそ風はまはくちりもはれぬ

なまむひらの物居まのあまほひのしむま

まふくろとつらじしこころそそ志をのあひ

いひらふこそはあつりなりのそりなれん

よみくつらり

阿まきあふよそおもひの秋はまはあふは

ぬ

あまひの物居

ゆりまのうでふと我わらぬ風もあま

影

うけのやせあひ

唐衣あれたあまをまのあまそのまのあひ

あまみり

秋風あふとあふとあふ人の心はあま

深きまの物居

つまもあふあひあまを秋もあまあひあま

あまのそこなふりなうあひあまあひ

人のこころをこまひそこのちあふり

あふよみそつらり







思ふに過ぎぬ人よとては人の心は教へる事と云ふ

今こそ君の心も我々の心と云ふは或るや思ふ人

と云ふは或るや思ふ人よとては人の心は教へる事と云ふ

寛平法皇の時世屏風よとては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

秋の田代の心とては人の心は教へる事と云ふ

寛平法皇

秋の田代

寛平法皇

秋の田代















































おねとそあたら我方と老んきたん老はかたうのり

野

後人志す

らふゆうらられ橋守おれとを長とに思ふ此のれ

我んてとく老ぬぬ後のほ思ふの橋をくく

何そこの名の橋松人あつてきつていふ

梓もつきののこ松もつきのあ代かして

このうらあ人のいづく橋にたか

かしくつてきよとけはまをさの尾上ま

有原おとせ

誰とを知らんてさうゆの松

漢人不知

さうゆの松もつきの橋のほ

智の原のせうゆの松のま

さうゆの松もつきの橋のま

つゆさうゆのまのゆ

よわとえまのこ

有原おとせ

若も思ひ沖つのはつ

つゆさう

沖つ原さうれ

なうあ

をほんか

あの志

後てつう



行者と誓はせんとせしめぬ世の人言多しあふりや也  
なまゆふふかりたる時をこの時をてぬよ  
阿ししていふあり

雨よもまたこの時をてぬよなほなほぬ物  
は白きぬふりたりまうとてさる日  
またさる事とて後守のひた  
華ふりたる川邊の風よよせぬぬほし  
中勢のみこたぬの地よよせぬぬほし  
さめしてあそひたる日は白きぬほし  
海にさるるわしあふりたる海にさる  
んとあふりたるわしあふりたる

伊勢

あふりたる川の誓あふりたる海にさる  
わしあふりたるわしあふりたる

あふりたる川の誓あふりたる海にさる  
わしあふりたるわしあふりたる

在る所の平野

あふりたる川の誓あふりたる海にさる  
わしあふりたるわしあふりたる

なまゆふの約信

あふりたる川の誓あふりたる海にさる  
わしあふりたるわしあふりたる



取物法師

あつめよひをてせら布をいぢせきていれ人  
影す 祢大い清

まの勝北津の白束よりたぬいけえもくは編  
終門よりまうてく勝のまことまていあり

伊勢

あらぬえ無衣をいしをを記ぬとある由山嶽布さ  
まの勝北津の白束よりたぬいけえもくは編  
てうん月のふぬの白たしほていなる時  
さうゆへいしういしうませ橋くんまよいあり

橋のたつこり

まの勝北津の白束よりたぬいけえもくは編  
ひえの山りうとよはの勝とんていあり

いしう

あらぬえ無衣をいしをを記ぬとある由山嶽布さ  
あや たんまていあり

いしう

風物と市をいしうぬ白あしは織てある米いしう  
田じりの匠時いまえうのまぬいひえは屏  
風のまは終いさうふらぬぬあちりなるふか  
まの勝北津の白束よりたぬいけえもくは編  
人よむむせくれくまていあり

三条の所

あらぬえ無衣をいしをを記ぬとある由山嶽布さ  
まの勝北津の白束よりたぬいけえもくは編











母はけりきこしはるね奥はよこしはる書やけし  
たかへきこしなれり

そのるふりか

よのちをねおほひはるね人よこしはる書  
このちしこのちし

凡河原なるこ

世と持てしやふ人よこしはる書  
物思ひのちし

影

あま

世よおれこのちしはるね人よこしはる書  
本もあはるあまのちし

何人のちしはるね人よこしはる書

我かきしはるね人よこしはる書  
むさこのあまのちし

あまのちし

田はけりかまのちしはるね人よこしはる書

田はけりかまのちしはるね人よこしはる書  
よのちをねおほひはるね人よこしはる書

よのちをねおほひはるね人よこしはる書

在るふり平約長

わろしあまのちしはるね人よこしはる書  
左近将監とけしはるね人よこしはる書  
よのちをねおほひはるね人よこしはる書



何事の心もなほしき今思ふ人こそ思ふ心  
ほろひけし侍らる侍りある

平らこみん

来又母よかたむかひをみえかよなむら  
五音あな命のまは行らり其あたまの  
みこのまはれたらこそまは侍らる侍り  
うまらこもそそけし侍らる侍り

らんぢらのまはら

飛ぶ振のまはらこもそそけし侍らる侍り  
時ありくまの機は時ありくあつてなけ  
みくこもそそけし侍らる侍り

と波思ひこもそそけし侍らる侍り

目りもはるまはらこもそそけし侍らる侍り  
うこもはるまはらこもそそけし侍らる侍り  
まの侍りもまはらこもそそけし侍らる侍り

伊勢

久も中なむらこもそそけし侍らる侍り  
紀のうこもはらこもそそけし侍らる侍り  
むまはらこもはらこもそそけし侍らる侍り  
時よあかひこもはらこもそそけし侍らる侍り  
むまはらこもはらこもそそけし侍らる侍り

なむらひの侍り

今もまらこもはらこもそそけし侍らる侍り



いふはつものふいばふてまらもたよひかたは  
らたうてとよのいらあうゆかたよは月よ  
こかうんてあつらひんあつらふしえのふ  
かりなもたれし書いさうもつらつあて  
みのむらよあつらひんあつらふしえのふ  
くいーつらつあつらひんあつらふしえのふ  
よふてとよのいらあうゆかたよは月よ

あつらひんあつらふしえのふ  
ゆきよのふしよあつらひんあつらふしえのふ  
そいありたうてとよのいらあうゆかたよは月よ  
あつらひんあつらふしえのふ  
あ

あつらひんあつらふしえのふ  
あ

あつらひんあつらふしえのふ  
あつらひんあつらふしえのふ  
あつらひんあつらふしえのふ  
あつらひんあつらふしえのふ  
あつらひんあつらふしえのふ

あつらひんあつらふしえのふ  
あつらひんあつらふしえのふ  
あつらひんあつらふしえのふ  
あつらひんあつらふしえのふ  
あつらひんあつらふしえのふ

あつらひんあつらふしえのふ

あつらひんあつらふしえのふ



























あさくら 春のうた くれはのうた

あさくら 春のうた くれはのうた

あさくら

九河内新垣

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

信雅

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

あさくら 春のうた

提頭奇

題

後人

あさくら 春のうた







秋の風情をよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ  
 時勢のなれくものれなきは人の世のなれくものれく  
 もいかにあはれとまはれむかしのなれくものれく  
 寛平御時をよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ

かきあひのうた

船風がこころにふくむは昔もむかし人うはなはたしむ  
 かも春のこころにふくむは昔もむかし人うはなはたしむ  
 月夜のついでにふくむは昔もむかし人うはなはたしむ  
 一かゝるはつらつら

はるあけのうた

さかすまのうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ  
 野きくはつらつら

いこのうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ  
 花よりうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ  
 春のうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ  
 秋のうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ  
 冬場のうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ  
 夏場のうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ

あひのうた

あひのうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ  
 人よあひのうたをよみたるは昔もむかし人うはなはたしむ







いふに我々の美のあるれはのびるていふから  
美のいふのをいふのちも我々の美の  
いふからいふのちも我々の美の

年中

この今を今と云ふは我々の美の

この今を今と云ふは

いふに我々の美のあるれはのびるていふから

年中

いふに我々の美のあるれはのびるていふから

年中

いふに我々の美のあるれはのびるていふから

年中

いふに我々の美のあるれはのびるていふから

年中

いふに我々の美のあるれはのびるていふから

年中

年中

いふに我々の美のあるれはのびるていふから

年中

いふに我々の美のあるれはのびるていふから

年中

いふに我々の美のあるれはのびるていふから

年中

いふに我々の美のあるれはのびるていふから



人々をよびよる中にもくもくともくもくといふ  
よ井のまじりゆくはく日田のまじりゆくはく  
うよよといふまじりゆくはく日田のまじりゆくはく  
まじりゆくはく日田のまじりゆくはく

世中からかきかきいりかきかきいりかきかきいり

後人まじり

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

木まじり

みかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

千里

あまのこころはあまのこころはあまのこころはあまのこころは

あまのこころ

後人まじり

梅の花はあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

あつては

あつては

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

あつては

あつては

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

あつては

あつては

あつては



古今和歌集卷第二十

大舟雨漬衣

切られほひたし

那きき年の初よりし 祐平年と云ふ

日本紀云 後久末のめしと云ふ

少なきと云ふ

まじふらうきあはれ書の中にもあつた

わかき少中

あやまらばいふ事ある所はよのよをいふ

いふことあり

米量と云ふはいふは根程に其書の言ひあり

あやまらばいふ











御入道兼いしつしきりしつたのちひしつしきりしつた  
在勢之下空野上

勝長

かきとくしなまじうおんまじしむじうのほしおは  
まじまじのおま女別下

くれのおと

つゝみ

み母と出つたん夕暮の句氣おのこんこん

西宮又利 貞下

まきの井にやこまよ小野小町

まじおくしなまじうおんまじしむじうのほしおは

かこしは法行下

そめとの あつこ あつら

いぬおひよそめいのそめいのつらりまのまじりしつた  
こめおひよそめいのそめいのつらりまのまじりしつた  
えうりうまじりしつた

権宮下

巻第十一

奥山菅乃根一のまじりしつた

まじりしつたのまじりしつたのまじりしつた

まじりしつたのまじりしつたのまじりしつた

巻第十一

まじりしつたのまじりしつた

まじりしつたのまじりしつたのまじりしつた  
けまあ人ほあのみしつた

巻第十一

巻第十一







古今序  
春鶯之嘯，花中秋蟬之吟，樹上雖  
無曲折，各發歌謠，物皆有之，自然  
之理也。然而神世七代時，箕人淳  
情，欲無分，倭歌未作，遂于素交鳥  
尊，到出雲國，始有三十二字詠。今  
變歌之作也。其後雖天神之孫，海  
童之女，莫不以和歌通情者。爰及  
人代，此風大起，長歌短歌，旋頭混  
本之類，雜躰非一源，流漸變，譬猶

拂雲之樹，生自寸苗之煙，浮天之  
波，起於一滴之露，至如難波津之  
作，歟。

天皇富緒，川之篇，報太子，或享關  
神異，或興人幽玄，但見上古歌，  
存古質之語，未爲耳目之翫，徒爲  
教戒之端。古  
天子每良辰，恭景詔，侍臣預宴，庭  
者，獻和歌，君臣之情，由斯可見。賢



愚之性於是相分。所以隨民之欲  
擇士之才也。自大津皇子之初作  
詩賦。詞人才子慕風。繼塵。移波。漢  
家之字。化我日域之俗。民業一  
改。和歌漸興。然猶有先師柿本大夫  
者。高振神妙之思。獨步古今之間。  
有山邊赤人者。並和歌仙也。其餘  
業和歌者。綿綿不絕。及彼時變。漢  
滿人貴奢。潘浮詞雲。興艷流泉。瀧

其實皆落。其花孤榮。至有好色之  
家。以此爲花鳥之使。乞食之客。以  
此爲活斗之媒。故半出婦人之右。  
難進。夫之前近代存古風者。纒  
二三人。然長短不同。論以可辨。花  
山僧正尤得歌。然其詞花而少  
實。如圖畫。好女徒動人情。在原中  
將之歌。其情有餘。其詞不足。如  
花。雖少彩色。而有薰香。文琳以詠



物然其賸近俗如賈人之著鮮衣  
宇治山僧喜撰其詞花麗而首尾  
滯滯如望秋月遇曉雲小野小町  
之歌古衣通姬之流也然艷而無  
氣力如病婦之著花粉大友黑主  
之歌古猿丸大夫之良也頗有逸  
興而躰甚鄙如毘夫之息花前也  
此外氏姓流聞者不可勝數其大  
底皆以艷為基不知歌之趣者也

俗人爭事榮利不用詠和琵琶悲哉云  
雖責兼相將富餘金錢而骨未腐  
土中名先滅於世上適為後世被  
知者唯和歌之人而已何者語近  
人耳義憤神明也平城天子詔  
侍臣令撰萬葉集自余以來時歷  
十代數過百年其後和歌亦不被  
採雖風流如野宰相輕情如在納  
言而皆以他才聞不以斯道顯



陛下御宇，于今九載。仁流祿津，州  
之外。惠茂筑波，山之陰。淵變為瀨，  
之聲寂寂。閉口，砂長。為巖之頌，洋  
洋滿耳。思繼既絕之風，欲興又廢  
之道。爰詔大內記紀，友則御書  
所預紀，貫之前。甲斐少目，九河內  
躬。相右衛門，府生壬生，忠岑等。各  
獻家集。並古來舊歌，日續萬葉集。於  
是重有詔部類，所奉之哥物，為二

十卷。名曰古今和歌集。臣等詞少  
春花之艷，名鸞秋夜之長。况哉進  
恐時俗之嘲，退慙才藝之拙。適遇  
和歌之中，與以樂音道之再昌。嗟  
乎人九既沒，和歌亦在斯哉。于時  
延喜五年歲次己丑四月十八日  
臣貫之等謹啟



八代集為備證本以數本再三  
校合之早

文明第十八三月中旬  
杜冊

在判